うりこんで「やめ！やめ！」（疾め）とどなる。又病人のある家からたのまれると「へいそく」を持って全員で出かけおはらいをする（四、五、六日の間にやる）。六日になると大人（世話をする者がきまっている）をたのんで「せーと」をくむ。この時村の家から「ごしんぼく」（心にたてる木）と「はねだけ」（もうそう竹の大きいもの）を寄付してもらう。「せーと」をくむとき今まで集めて「せーとかみ」のところに積み上げてあったおかざり、すす竹、笹、木の葉などをその中に入れるのである。くみ終るとごろいしをその周にならべる。七日朝は早く起きる。小がしらは「こーりとり」と称して裸になって海にとびこむ。上ってくると小がしらが先に立ち他の者がこれに続き、村の家を起しにゆく。「せーともすからおきらっせ、じんじもばんばもおきらっせ」とどなる。廻り終ると小がしらは湯に入る。この日のため「すいふろ」を借りておき、湯をわかしておく。湯に入り終ると着かえて「せーと」のところに行き、神酒を「せーと」の前三ヵ所にそそぎ、中かしら以上は一口ずつのむ。見に来ている者にものんでもらう。「さんまた」（おかざりの一種）の一本をほぐして小がしらが火をつけ、「せーと」に燃しつける。「せーと」は燃え上る。「ごしんぼく」が浜へ倒れるとその年は魚がとれる。岡へ倒れると米がとれると信じられている。「ごしんぼく」が倒れると皆で燃えかすをむしりとって持ち帰り門口にさしておく。盗難よけになると信じられている。「せーと」の燃え残りを集めて「てっき」（金網の一種）で餅をやいて持って帰り、家中で食う。悪い風邪をひかないと信ぜられている。「せーともし」がすむと灰も何もそのままにしてやどへ帰る。小がしらが菓子を買って皆にくばり、残金を分配する。この配分は小がしらがあらかたとってしまう。中かしらはその半分位、四年生のいもは入会金の二倍位、三年生のいもは入会金位しかもらえない。やどを掃除して解散となる。（古くはせーともしをしているとき全員で「こーりとり」と称して海に入り、さんまたを手にもって火のまわりを走りながら地をたたいたというが、大正頃にはもうそれをやらなかったそうだ。）

和田の「さいと」

赤橋尚太郎

三浦市初声町和田の左義長について山田国蔵氏（明治十五年生）から明治二十三年頃のさいとの様子をきいた。和田では「世話やき」というのが二人あって色々の指図をする。他のものは同列でそれに従って行動をとった。尋常一年になると仲間に入る。世話やきは高等科（尋常科は四年まで）の者の中から選ばれた。正月四日一同集まっておかざりを集めにゆく。各家から銭や米をもらってくる。銭は二銭か、三銭だが多くは米をくれて銭をくれない。米ばかりで銭が集まらぬと米の一部を引とってもらい銭にしたという。五日には神社前の広場にさいとをくむ。中心に杭をうち、これに大竹をしばりつけて心にする。上の方には松を一本しばりつける。これを中心に竹や松で杉なりに作り上げる。「ごりょういし」と

いう丸石を心のところへよせかけておく。内部には空洞を作り、わらなどを敷く。夜になるとその中に夜具などを持ち込んで半数交替で番をする。昼になると他の半数が尻まくりになって「でーざいな、でーざいな、でないものはがにごぞう」とどなりながら「さんまた」で地をたたきながら、水のある田へ走ってゆき、膝位まで水に入り、又どなりながらさんまたで地をたたきながら帰ってくる。十四日まで交替でこれをやる。十四日は朝早くおき出し、空洞中に外に積んであったおかざりその他をつめる。特に村人を呼び集めることをしないが、大体時刻をみはからって餅をもって集まってくる。酒一合を買っておき、「さいと」にかけ、残りを一口ずつのむ。世話やきが「さいと」に火をつける。燃え上ると書初をもす。高く上ると手が上ると信ぜられている。持参した餅を「さいと」の火で焼いて持って帰り皆で分けて食う。「くすめき」（口中がはれる病）のまじないになると信ぜられている。さいとは日の出の方角に倒れると縁起がよいとされていた。終るとごもくめしや菓子が分配され行事が終る。（近くの海岸では「さいと」は神社下の海岸にくまれた。子供たちは毎日赤はちまきをし、裸で「でーざいな、でーざいなでないものはがにごぞう」をうたいながらさんまたで地をたたきたたき海へ「こり」をとりにいったという。）

三浦半島漁業発達の史的考察の一部（紀州漁民に依る開発）

高　橋　恭　一

大胆な言葉かも知れないが、三浦半島の漁業が本格的な形をし出したのは、中世末の頃からだといいたい。しかしそれ以前とても決して漁猟を業とする者がなかったのではない。鎌倉期に一大消費地となった鎌倉に近い地理的条件から、特に西側相模湾岸の漁業が漸次整って来たであろうことは勿論否定出来難い。

今ここでそれらを含めた半島全域にわたる考察をしたいが、何分にも紙面が許さないので、主として東京湾岸漁業発達のあとだけを考えてみることにしたい。兎に角、三浦半島の漁業が本格的発展の出発は、小田原北条氏特に氏綱・氏康の頃からであろう。しかもこの発展は上方漁民の力によったもので、東京湾側の開発は主として紀州漁民の手によったものである。以下この点のみを説明してみたいと思う。

小田原が豆相武の文化を集中し、これらの地域の中心となって発展し、それにともなっての産業開発が行われ漁業の進展もあったことは申す迄もない。特に網漁の勃興はこの期の一特徴である。北条氏はこの網漁業に力を入れ、これを奨励保護し上方漁民を酒匂村に移住させた程であり、葛網漁業はこれらから次第に紀州・摂州・勢州などの漁民によって当地方に伝播され、技術的に進んだこれら出稼移住民によって、地方漁民に漸